

赤いろうそくと人魚

小川未明

青空文庫

人魚は、南の方の海にばかり棲んでいるではありません。

北の海にも棲んでいたのであります。

北方の海の色は、青うございました。あるとき、岩の上に、

女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。

雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限らない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。

なんという、さびしい景色けしきだろうと、人魚にんぎよは思おもいました。自分じぶん分ぶんたちは、人間にんげんとあまり姿すがたは変わかっていない。魚さかなや、また底そこぼ深かい海うみの中に棲すんでいる、気きの荒あらい、いろいろな獣物けものなどとかくらべたら、どれほど人間にんげんのほうに、心こころも姿すがたも似にているかしれない。それなのに、自分じぶんたちは、やはり魚さかなや、獣物けものなどといっしょに、冷つめたい、暗くらい、気きの滅め入りそううみな海なの中に暮くらさなければならぬというのおもは、どうしたことだろうと思おもいました。

長ながい年とし月つきの間あいだ、話はなしをする相手あいてもなく、いつも明あかるい海うみの面おもてを眺ながめながら、暮くらしてきおもたことを思おもいますと、人魚にんぎよはたまらなかつたのでありまおもす。そして、月つきの明あかるく照てらす晩ばんに、海うみの面おもてに浮うかんで、岩いわの上うへに休やすんで、いろいろな空想くうそうにつねふけるのが常つねで

ありました。

「人間の住んでいる町は、美しいということだ。人間は、魚

よりも、また動物よりも、人情があつてやさしいと聞いている。

私たちは、魚や動物の中に住んでいるが、もつと人間のほ

うに近いのだから、人間の中に入つて暮らされないことはない

だろう。」と、人魚は考えました。

その人魚は女でありました。そして妊娠でありました。……

私たちは、もう長い間、このさびしい、話をするものもない、北

の青い海の中で暮らしてきたのだから、もはや、明るい、にぎや

かな国は望まないけれど、これから産まれる子供に、せめても、

こんな悲しい、頼りない思いをさせたくないものだ。……

子どもから別れて、ひとり、さびしく海の中に暮らすということ、このうえもない悲しいことだけれど、子供がどこにいても、しあわせに暮らしてくれたなら、私の喜びは、それにまじったことはい。

人間は、この世界の中で、いちばんやさしいものだと言っている。そして、かわいそうなものや、頼りないものは、けつしていじめたり、苦しめたりすることはないと聞いている。いったん手づけたなら、けつして、それを捨てないとも聞いている。幸い、わたしは、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胴から上は人間そのままなのであるから——魚や獣物の世界でさえ、暮らされるところを思えば——人間の間の世界で暮らされないこと

はない。一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、きつと無慈悲に捨てることもあるまいと思われる。……

人魚は、そう思ったのであります。

せめて、自分の子供だけは、にぎやかな、明るい、美しい町で育てて大きくしたいという情けから、女の人魚は、子供を陸の上に産み落とそうとしたのであります。そうすれば、自分は、ふたたび我が子の顔を見ることはできぬかもしれないが、子供は人間の仲間入りをして、幸福に生活をする事ができるのであると思つたのです。

はるか、かなたには、海岸の小高い山にある、神社の燈火がちらちらと波間に見えていました。ある夜、女の人魚は、子

ども
供を産み落とすために、冷たい、暗い波の間を泳いで、陸の方に
む
向かつて近づいてきました。

二

海岸に、小さな町がありました。町には、いろいろな店があ
りましたが、お宮のある山の下に、貧しげなろうそくをあきなつ
ている店がありました。

その家には、年よりの夫婦が住んでいました。おじいさんがろ
うそくを造つて、おばあさんが店で売つていたのであります。こ
の町の人や、また付近の漁師がお宮へおまいりをするときに、

この店に立ち寄って、ろうそくを買って山へ上りました。

山の上には、松の木が生えていました。その中にお宮がありました。海の方から吹いてくる風が、松のこずえに当たって、昼も、夜も、ゴーゴーと鳴っています。そして、毎晩のように、そのお宮にあがつたろうそくの火影が、ちらちらと揺らめいているのが、遠い海の上から望まれたのであります。

ある夜のことでありました。おばあさんは、おじいさんに向かつて、

「私たちが、こうして暮らしているのも、みんな神さまのお蔭だ。この山にお宮がなかったら、ろうそくは売れない。私どもは、ありがたいと思わなければなりません。そう思ったついでに、私は、

これからお山やまへ上のぼつておまいりをしてきましょう。」といいました。

「ほんとうに、おまえのいうとおりだ。私も毎日まいにち、神さまをありがたいと心こころではお礼れいを申もうさない日はないが、つい用事ようじにかまけて、たびたびお山やまへおまいりにゆきもしない。いいところへ気がつきなされた。私の分わたくしぶんもよくお礼れいを申もうしてきておくれ。」と、おじいさんは答こたえました。

おばあさんは、とぼとぼと家いえを出でかけました。月のいい晩ばんで、昼間ひるまのように外そとは明るあかかったです。お宮みやへおまいりをし、おばあさんは山やまを降おりてきますと、石段いしだんの下したに、赤あかん坊ぼうが泣ないていました。

「かわいそうに、捨て^す子^ごだが、だれがこんなところに捨て^すたのだらう。それにしても不思議^{ふしぎ}なことは、おまいりの帰り^{かえ}に、私^{わたし}の目^めに止^とまるというのは、なにかの縁^{えん}だらう。このままに見捨^{みす}てていつては、神^{かみ}さまの罰^{ばち}が当^あたる。きつと神^{かみ}さまが、私^{わたし}たち夫婦^{ふうふ}に子^こ供^{ども}のないのを知^しつて、お授^{さず}けになつたのだから、帰^{かえ}つておじいさんと相談^{そうだん}をして育^{そだ}てましよう。」と、おばあさんは心^{こころ}の中^{うち}でいつて、赤^{あか}ん坊^{ぼう}を取り上^あげながら、

「おお、かわいそうに、かわいそうに。」といつて、家^{うち}へ抱^だいて帰^{かえ}りました。

おじいさんは、おばあさんの帰^{かえ}るのを待^まっていますと、おばあさんが、赤^{あか}ん坊^{ぼう}を抱^だいて帰^{かえ}つてきました。そして、一^ぶ部^{じゆう}始^し終^{ゆう}を

おばあさんは、おじいさんに話はなしますと、

「それは、まさしく神かみさまのお授さずけ子ごだから、大事だいじにして育そだてなければ罰ばちが当あたる。」と、おじいさんも申もうしました。

二人ふたりは、その赤あかん坊ぼうを育そだてることにしました。その子こは女おんなの子こであつたのです。そして胴どうから下したのほうは、人にんげん間の姿すがたでなく、魚さかの形かたちをしていましたので、おじいさんも、おばあさんも、話はなしに聞きいている人にんぎよ魚ぎよにちがいないと思おもいました。

「これは、人にんげん間の子こじやあないが……。」「と、おじいさんは、赤あかん坊ぼうを見みて頭あたまを傾かたむけました。

「私わたしも、そう思おもいます。しかし人にんげん間の子こでなくても、なんと、やさしい、かわいらしい顔かおの女おんなの子こではありませんか。」「と、おば

あさんはいいました。

「いいとも、なんでもかまわな。神さまのお授けなさった子供だから、大事にして育てよう。きつと大きくなったら、りこうな、いい子になるにちがいない。」と、おじいさんも申しました。

その日から、二人は、その女の子を大事に育てました。大きくなるにつれて、黒目勝ちで、美しい頭髪、肌の色のうす紅をした、おとなしいりこうな子となりました。

三

娘は、大きくなりましたけれど、姿が変わっているので、恥ず

かしがって顔を外へ出しませんでした。けれど、一目その娘を見
 た人は、みんなびつくりするよう美しい器量でありましたか
 ら、中にはどうかしてその娘を見たいと思つて、ろうそくを買い
 に来たものもありました。

おじいさんや、おばあさんは、

「うちの娘は、内気で恥ずかしがりやだから、人さまの前には出
 ないのです。」といつていました。

奥の間でおじいさんは、せつせとろうそくを造つていました。

娘は、自分の思いつきで、きれいな絵を描いたら、みんなが喜ん
 で、ろうそくをかうだろうと思ひましたから、そのことをおじい
 さんに話しますと、そんならおまえの好きな絵を、ためしにかい

てみるがいいと答こたえました。

娘むすめは、赤あかい絵えの具ぐで、白しろいろうそくに、魚さかなや、貝かいや、または海か

いそ

草くさのようなものを、産うまれつきで、だれにも習ならったのではない

が上じょうず手に描えがきました。おじいさんは、それを見みるとびっくりい

たしました。だれでも、その絵えを見みると、ろうそくがほしくなる

ように、その絵えには、不ふ思議しぎな力ちからと、美うつくしさとがこもっていたの

であります。

「うまいはずだ。人にんげん間げんではない、人にんぎよ魚ぎよが描かいたのだもの。」

と、おじいさんは感かん嘆たんして、おばあさんと話はなし合あいました。

「絵えを描かいたろうそくをおくれ。」といつて、朝あさから晩ばんまで、子こ

供どもや、大おとな人がこの店みせ頭さきへ買かいにきました。はたして、絵えを描かい

たろうそくは、みんなに受けたのであります。

すると、ここに不思議な話がありました。この絵を描いたら、
 そくを山の上のお宮にあげて、その燃えさしを身につけて、海に
 出ると、どんな大暴風雨の日でも、けっして、船が転覆した
 り、おぼれて死ぬような災難がないということが、いつからと
 もなく、みんなの口々に、うわさとなつて上りました。

「海の神さまを祭つたお宮さまだもの、きれいなろうそくをあげ
 れば、神さまもお喜びなさるのにきまつている。」と、その町の
 人々はいいました。

ろうそく屋では、ろうそくが売れるので、おじいさんはいつし
 ようけんめいに朝から晩まで、ろうそくを造りますと、そばで娘

は、手の痛くなるのも我慢して、赤い絵の具で絵を描いたのであります。

「こんな、人間並でない自分をも、よく育てて、かわいがってくださったご恩を忘れてはならない。」と、娘は、老夫婦のやさしい心を感じて、大きな黒い瞳をうるませたこともあります。

この話は遠くの村まで響きました。遠方の船乗りや、また漁師は、神さまにあがった、絵を描いたろうそくの燃えさしを手に入れたいものだというので、わざわざ遠いところをやってきました。そして、ろうそくを買って山に登り、お宮に参詣して、ろうそくに火をつけてささげ、その燃えて短くなるのを待つて、またそれをいただいて帰りました。だから、夜となく、昼となく、

やま うえ
 山の上のお宮には、ろうそくの火の絶えたことはありません。殊
 に、夜は美しく、燈火の光が海の上からも望まれたのであります。
 「ほんとうに、ありがたい神さまだ。」という評判は、世間
 にたちました。それで、急にこの山が名高くなりました。
 神さまの評判は、このように高くなりましたけれど、だれ
 も、ろうそくに一心をこめて絵を描いている娘のことを、思うも
 のはなかつたのです。したがって、その娘をかわいそうに思つた
 人はなかつたのであります。娘は、疲れて、おりおりは、月のい
 い夜に、窓から頭を出して、遠い、北の青い、青い、海を恋しが
 って、涙ぐんでながめていることもありました。

四

あるとき、南みなみの方ほうの国くにから、香具師やしが入はいつてきました。なにか北きたの国くにへいつて、珍めづらしいものを探さがして、それをば南みなみの国くにへ持もつていつて、金かねをもうけようといふのであります。

香具師やしは、どこから聞きき込こんできたものか、または、いつ娘むすめの姿すがたを見みて、ほんとうの人にんげん間げんではない、じつに世よに珍めづらしい人にんぎよ魚ぎよであることを見抜みぬいたものか、ある日ひのこと、こつそりと年寄としより夫婦ふうふのところへやつてきて、娘むすめにはわからないように、大金たいきんを出だすから、その人にんぎよ魚ぎよを売うつてはくれないかと申もうしたのであります。

年としよ寄り夫婦ふうふは、最初さいしよのうちは、この娘むすめは、神かみさまがお授さずけになつたのだから、どうして売うることができよう。そんなことをしたら、罰ばちが当たるといつて承しょう知ちをしませんでした。香具師やしは一度ど、二度断どられてもこりずに、またやってきました。そして、年としより夫婦ふうふに向むかつて、

「昔むかしから、人魚にんぎよは、不吉ふきつなものとしてある。いまのうちに、手てもとから離はなさないと、きつと悪いわることがある。」と、まことしやかに申もうしたのであります。

年としより夫婦ふうふは、ついに香具師やしのいうことを信しんじてしまいました。それに大金たいきんになりますので、つい金かねに心こころを奪うばわれて、娘むすめを香具師やしに売うることに約やく束そくをきめてしまったのであります。

香具師は、たいそう喜んで帰りました。いずれそのうちに、娘を受け取りにくるといいました。

この話を娘が知ったときは、どんなに驚いたでありましょう。内気な、やさしい娘は、この家から離れて、幾百里も遠い、知らない、熱い南の国へゆくことをおそれました。そして、泣いて、年より夫婦に願ったのであります。

「わたしは、どんなにでも働きますから、どうぞ知らない南の国へ売られてゆくことは、許してくださいまし。」といいました。

しかし、もはや、鬼のような心持ちになつてしまつた年寄り夫婦は、なんといつても、娘のいうことを聞き入れませんでした。娘は、へやのうちに閉じこもつて、いつしんにろうそくの絵を

描かいていました。しかし、年とし寄り夫婦ふうふはそれを見みても、いじらし
いと、哀あれとも、思おもわなかつたのであります。

月つきの明あるい晩ばんのことであります。娘むすめは、独ひとり波なみの音おとを聞ききなが
ら、身みの行ゆく末すえを思おもうて悲かなしんでいました。波なみの音おとを聞きき
と、なんとなく、遠とおくの方ほうで、自じ分ぶんを呼よんでいるものがあるよう
な気きがしましたので、窓まどから、外そとをのぞいてみました。けれど、
ただ青あおい、青あおい海うみの上うえに月つきの光ひかりが、はてしなく、照てらしているば
かりでありました。

娘むすめは、また、すわつて、ろうそくに絵えを描かいていました。する
と、このとき、表おもての方ほうが騒さわがしかつたのです。いつかの香や具し師しが、
いよいよこの夜よ娘むすめを連つれにきたのです。大おおきな、鉄てつ格ごう子しのはま

つた、四角な箱を車に乗せてきました。その箱の中には、かつて、とらや、ししや、ひょうなどを入れたことがあるのです。

このやさしい人魚も、やはり海の中の獣物だといふので、とらや、ししと同じように取り扱おうとしたのであります。ほどなく、この箱を娘が見たら、どんなにたまげただであります。

娘は、それとも知らずに、下を向いて、絵を描いていました。そこへ、おじいさんと、おばあさんが入ってきて、

「さあ、おまえはゆくのだ。」といつて、連れだそうとしました。娘は、手に持っていたろうそくに、せきたてられるので絵を描くことができずに、それをみんな赤く塗ってしまいました。

娘は、赤いろうそくを、自分の悲しい思い出の記念に、二、三

本残ぼめこしていったのであります。

五

戸とを閉しめて、寝ねてしまいました。
ほんとうに穏おだやかな晩ばんのことです。おじいさんとおばあさんは、

真夜中まよなかごろでありました。トン、トン、と、だれか戸とをたたく
ものがありました。年寄としよりのものですから耳みみさとく、その音おとを聞き
きつけて、だれだろうと思おもいました。

「どなた？」と、おばあさんはいいました。

けれどもそれには答こたえがなく、つづけて、トン、トン、と戸とを

たたきました。

おばあさんは起きてきて、戸を細めにあけて外をのぞきました。すると、一人の色の白い女が戸口に立っていました。

おんな女はろうそくを買いにきたのです。おばあさんは、すこしでもお金がもうかることなら、けっして、いやな顔つきをしませんでした。

おばあさんは、ろうそくの箱を取り出して女に見せました。そのとき、おばあさんはびっくりしました。女の長い、黒い頭髪がびつしよりと水にぬれて、月の光に輝いていたからであります。女は箱の中から、真っ赤なろうそくを取り上げました。そして、じつとそれに見入っていました。やがて金を払って、その赤い

ろうそくを持って帰ってゆきました。

おばあさんは、燈火のところ、よくその金をしらべてみると、それはお金ではなくて、貝がらでありました。おばあさんは、だまされたと思つて、怒つて、家から飛び出してみましたが、もはや、その女の影は、どちらにも見えなかつたのであります。

その夜のことであります。急に空の模様が變つて、近ごろにない大暴風雨となりました。ちようど香具師が、娘をおりの中に入れて、船に乗せて、南の方の国へゆく途中、沖にあつたところであります。

「この大暴風雨では、とても、あの船は助かるまい。」と、おじいさんと、おばあさんは、ぶるぶると震えながら、話をしていま

した。

夜が明けると、沖は真つ暗で、ものすごい景色でありました。

その夜、難船をした船は、数えきれないほどであります。

不思議なことには、その後、赤いろうそくが、山のお宮に点つ

た晩は、いままで、どんなに天気がよくても、たちまち大あらし

となりました。それから、赤いろうそくは、不吉ということにな

りました。ろうそく屋の年より夫婦は、神さまの罰が当たったの

だといって、それぎり、ろうそく屋をやめてしまいました。

しかし、どこからともなく、だれが、お宮に上げるものか、た

びたび、赤いろうそくがともりました。昔は、このお宮にあがつ

た絵の描いたろうそくの燃えさしさえ持つていれば、けっして、

海うみの上うえでは災難さいなんにはかからなかつたものが、今度こんどは、赤いろうそくを見ただけでも、そのものはきつと災難さいなんにかかつて、海うみにおぼれて死しんだのであります。

たちまち、このうわさが世間せけんに伝つたわると、もはや、だれも、この山やまの上うえのお宮みやに参詣さんけいするものがなくなりました。こうして、昔むかし、あらたかであつた神かみさまは、いまは、町まちの鬼門きもんとなつてしまいました。そして、こんなお宮みやが、この町まちになければいいものと、うらまぬものはなかつたのであります。

船乗ふなのりは、沖おきから、お宮みやのある山やまをながめておそれました。夜よるになると、この海うみの上うえは、なんとなくものすごうございました。はてしもなく、どちらを見みまわしても、高たかい波なみがうねうねとうね

つています。そして、岩いわに砕くだけては、白しろいあわが立ち上あがって
 ます。月つきが、雲間くもまからまれて波なみの面おもてを照てらしたときは、まことに
 気味悪きみわるうございました。

真まつ暗くらな、星ほしもみえない、雨あめの降ふる晩ばんに、波なみの上うえから、赤あかいろ
 うそくの灯ひが、漂ただよって、だんだん高たかく登のぼって、いつしか山やまの上うえの
 お宮みやをさして、ちらちらと動うごいてゆくのを見みたものがあります。

幾いくねん年ねんもたたずして、そのふもとの町まちはほろびて、滅なくなつて
 しまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅰ」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「東京朝日新聞」

1921（大正10）年2月16日～20日

※表題は底本では、「赤《あか》いろいろそくと人魚《にんぎよ》」
となっております。

※初出時の表題は「赤い蠟燭と人魚」です。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年12月31日作成

2012年4月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いろうそくと人魚

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>